

1984年4月、国立遺伝学研究所（遺伝研）は国立大学共同利用機関となり、組織を再編した。遺伝情報研究センターが設立され、84年度と85年度に二つずつ研究室が新設された。

この4研究室が全て日本DNAデータバンク（DDBJ）のために設けられたかという点、そうではなかった。DDBJの実務を担ったのはこのうち遺伝情報分析研究室（分析研）だけで、他の3研究室に赴任した教員らの研究テーマは生物情報とは縁の薄い実験系

## 密接な学者の関係 礎に

の内容が主だった。後に95年度の改組で、分析研以外は新設の「構造遺伝学研究所センター」に組み入れられ、研究棟の看板もかけ替えられた。

ともあれ、DDBJの器

は遺伝研に設けられた。初代担当者となる宮沢三造が米国から帰国して着任するまでの間、DDBJの招致をけん引した丸山毅夫がデータ入力と配布に着手した。丸山に招かれて83年9

月から遺伝研の研究員となっていた五條堀孝も加わった。いずれも当時の日本では極めて

少なかった集団遺伝学者である。

彼らのつながりは強かったようだ。ほとんど独学

1987年に新築された遺伝情報研究センター棟（現在の構造遺伝学研究所セン

ター棟）

で集団遺伝学の道に入った根井正利は、千葉県の放射線医学総合研究所から毎月、時には毎週のように遺伝研を訪ねて議論を深めたという。後に根井がテキサス大に移籍すると、丸山は根井の研究室に定期的に滞在した。そして、根井研に留学中だった五條堀を自らの研究室に迎え入れた。

さらに、同じく根井研に留学した館野義男と斉藤成也が後に遺伝研に、そしてDDBJの運営に加わる。

設立からおよそ20年間、DDBJは集団遺伝学者らの密接な関係の上に存在したといえよう。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）

